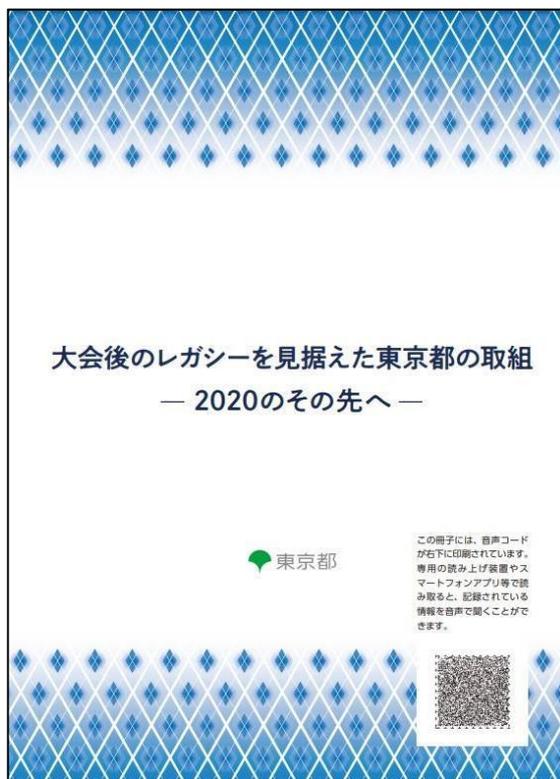


大会後のレガシーを見据えた 東京都の取組



「大会後のレガシーを見据えた
東京都の取組-2020のその先へ-」
(令和3年7月) より抜粋

2020大会に向けて

大会の競技施設をはじめ、身近な場でスポーツができる環境を整備

- 大会の競技会場となる新たなスポーツ施設について、将来にわたり有効に活用できるよう整備
- 武蔵野の森総合スポーツプラザと東京スタジアムを一体として、多摩地域のスポーツ拠点を形成
- 既存スポーツ施設のバリアフリー化や、区市町村のスポーツ施設の整備支援

東京都における様々なスポーツ施設



2020のその先へ

大会の競技施設をはじめ、スポーツ施設の新たな魅力を最大限発揮し、スポーツを中心に様々な目的で都民が集うことができる拠点に



大会後の戦略的な活用により、スポーツ施設が東京の新たな魅力へ

- 水上、アーバン、冬季競技など多様なスポーツ機会の創出
- 5G等の最先端技術の導入による新しい観戦、体験機会を提供
- 国内外の主要な大会を積極的に誘致・開催
- 民間アイデアを活用し、会議やイベント等の開催の場など、ユニークベニューとしても活用を促進してスポーツ・文化の新たな拠点に
- 誰もが利用しやすいように、施設やアクセスのバリアフリー環境を整備
- 予約システム・キャッシュレス決済の対象拡大による都民サービスの向上
- ネーミングライツ導入等による収益向上
- 東京スタジアム内の室内施設をパラスポーツ練習拠点としての活用を検討

都が新たに整備した競技施設等の魅力

① 東京アクアティクスセンター

◆日本水泳の中心となる



世界最高水準の水泳場
 ・国内外の主要な国際大会を開催
 ・水泳の裾野拡大と世界を目指すアスリートを育成
 (2020年2月竣工)

② 海の森水上競技場

◆アジアの水上新競技の拠点



・水上スポーツ体験の機会提供等による水上競技の裾野拡大
 ・ユニークベニューとして、イベント会場としても活用
 (2019年5月竣工)

③ 有明アリーナ

◆東京の新たなスポーツ・文化の拠点



・コンセッション方式による管理運営
 ・5GやARなどの最先端技術を活用したイベント等も開催
 (2019年12月竣工)

④ カヌー・スラロームセンター

◆国内初の人工スラロームコースを活用した様々な水上スポーツ・レジャーを楽しめる施設



・安定した競技環境の下でアスリートを強化・育成
 (2019年5月竣工)

⑤ 大井ふ頭中央海浜公園ホッケー競技場

◆ホッケーをはじめ、様々なスポーツで利用できる多目的競技場



・公園内の他施設と連携し、総合的なスポーツ・レクリエーションの拠点を形成
 (2019年6月竣工)

⑥ 夢の島公園アーチェリー場

◆アーチェリーを中心として、多様な用途に活用



・芝生広場として多様な活用を図り、夢の島公園と一体となり、都民に憩いの場を提供
 (2019年2月竣工)

⑦ 武蔵野の森総合スポーツプラザ

◆多摩地域のスポーツ拠点



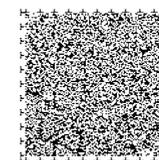
(2017年3月竣工)

⑧ 東京辰巳国際水泳場

◆都立初の通年のアイスリンクへ転換



大会の競技施設が集積する有明レガシーエリアでスポーツを通じたウェルネスを実現



2020大会に向けて

スポーツを「する・みる・支える」環境の整備

- 都民が気軽に参加できるスポーツイベント等を開催し、都民がスポーツに触れられる機会を創出
- 競技会場や既存スポーツ施設を活用するとともに、道路・遊歩道・公園などをウォーキング・ランニング・サイクリングコースとして活用



TOKYOウォーク

都民のスポーツ実施率 **60.4%** (2020年)

53.9% (2012年)

※週1回以上スポーツをする都民の割合

- 誰もが身近な地域でスポーツできるように、地域スポーツクラブの設立・育成等を総合的に支援 ▶ **地域スポーツクラブ設置数 146クラブ** (2020年度末時点)
- 都内の大学・企業等が所有するスポーツ施設を利用できるよう協定を締結
- スポーツ活動を推進する企業を「東京都スポーツ推進企業認定制度」により認定し、広く周知 ▶ **319社を認定** (2020年度末時点)
- 国際大会の誘致支援等トップレベルのスポーツ大会の観戦機会を創出
- 様々なスポーツイベントにおいてボランティアの活躍の場を提供

アスリートが活躍できる環境の整備

- 優れた運動能力を有する中学生を募集・選考し、適性のある競技でトップアスリートとして活躍できるよう支援
- オリンピックやパラリンピックなどへの出場が期待される東京の選手を「東京アスリート認定選手」に認定し、強化費等を支援 ▶ **累計1,034人** (2020年度末) を認定
- アスリートや企業へのセミナー等によりアスリートの雇用をサポート
- 女性の身体的特徴等に配慮したアスリート育成を支援するとともに、競技団体におけるスポーツ・インテグリティを推進



受動喫煙防止対策の推進

- 「東京都受動喫煙防止条例」制定 (2020年4月全面施行)
 - ・ 学校等では屋内禁煙に加え、屋外喫煙場所設置不可 (努力義務) や従業員がいる飲食店の原則屋内禁煙などの都独自のルールを構築
 - ・ 電話やチャットボットによる相談対応や普及啓発を実施



受動喫煙防止対策 解説動画

2020のその先へ

東京2020大会で躍動するアスリートの姿が、都市のレガシーとなり、まち全体が誰もがスポーツを楽しめるスポーツフィールドに進化



スポーツが日常に溶け込んでいる、スポーツフィールド・東京に

- ◆ 都民に身近な地域のスポーツ振興を支援

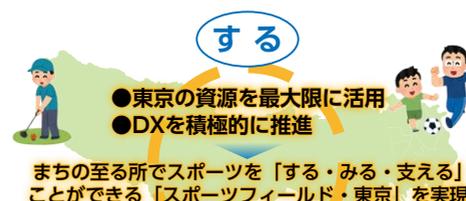


- ◆ 参加型スポーツイベントによりスポーツを身近に



都民のスポーツ実施率が **70%**に向上し、さらに**世界最高水準**に (2030年)

- ◆ 東京ならではの都市空間を活用



- ◆ スポーツを核として、大学や民間企業等と連携



- ◆ 都のスポーツ施設等の新たな魅力を最大限発揮



- ◆ スポーツ観戦の新しい楽しみ方を創出



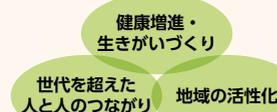
- ◆ アスリートの活躍を通じたスポーツ気運の醸成



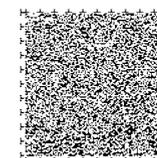
- ◆ スポーツを支える支援の輪を広げる

スポーツを核とした新たな価値や魅力を創出

身近な地域でスポーツを通じたウェルネスを実現



- DXを推進し、継続的にスポーツができる仕掛けをうつ
 - ・ スタートアップ等の斬新なアイデアや最先端技術を活用
 - ・ AR等を活用したバーチャルなスポーツ体験機会を提供



2020大会に向けて

パラリンピック・ムーブメントの創出

● パラスポーツ応援プロジェクト「TEAM BEYOND」

- ・パラスポーツの情報発信や、登録メンバーを始め幅広い層が参加できるイベントの実施、企業・団体によるパラスポーツ支援を後押し

▶ **メンバー：個人や企業など130万人以上(2020年)**



TEAM BEYOND観戦会

● パラリンピック体験プログラム「NO LIMITS CHALLENGE」

- ・パラリンピック競技の体験、競技紹介パネルの展示、アスリートのトークショーなどを通して、パラリンピックの魅力を体験・体感できる機会を都内全域で提供

▶ **2019年度末までに都内全区市町村で実施**

▶ **「NO LIMITS SPECIAL 2020」：2日間で約4万6千人が来場**



NO LIMITS CHALLENGE 体験会

● パラスポーツの魅力を広く発信

- ・パラアスリート、学識経験者、各界で活躍されている方々をメンバーとする「東京2020パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会」を設置。メンバーは「パラ応援大使」として、パラスポーツの魅力やバリアフリーの推進について広く発信

場の確保、支える人材の育成、競技力の向上により、パラスポーツを振興

- 都立障害者スポーツセンターについて、屋内プールにおけるレーンや家族更衣室の増設などの改修を行い、機能や利便性を向上



プールのレーンを増設
(東京都多摩障害者
スポーツセンター)

- 地域における障害者スポーツの拠点の一つとして、都立特別支援学校の体育施設の活用を促進

- 「障がい者スポーツ指導員」の資格取得を促進するほか、指導員等のネットワーク構築を推進

- セミナーやパラスポーツ振興の担い手として期待される団体の研修会等でパラスポーツの知識・情報を提供

- 次世代を担う選手を発掘・育成するため、競技体験や競技の継続に向けたフォローを実施

- パラリンピック等への出場が期待される選手を「東京アスリート認定選手」として認定し、活動を支援



パラスポーツ次世代選手
発掘プログラム

2020のその先へ

パラスポーツが誰もが楽しめるポピュラーなコンテンツとなり、まちの至るところで人々がパラスポーツを楽しんでいる都市を実現



パラスポーツを通じた共生社会を実現

- 障害の有無を問わず「いつでも、どこでも、いつまでも」楽しめる取組を推進

パラリンピック・ムーブメントの継承・発展

場の確保



- 身近な活動の場・機会の充実
- 施設のバリアフリー環境が充実

支える人材の育成



- パラスポーツを支える人材の裾野拡大と質の向上
- ボランティア同士の交流機会や学びの場も充実

理解促進



- ファンやサポーターの裾野拡大
- 競技の観戦機会等の充実により、人気コンテンツ化
- ユニバーサルなスポーツとして楽しむ体験機会を創出

競技力向上



- 国際大会で活躍するパラアスリートが継続的に輩出されるとともに、より身近な存在に
- 競技スポーツを始める障害者が増加

障害者の
スポーツ参加
機会が増加

障害の有無に
関わらない
交流機会の創出

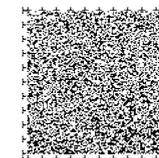
ユニバーサルな
スポーツ
として楽しむ

ポピュラーな
コンテンツ
となっている

パラスポーツを通じた共生社会の実現

障害のある
都民のスポーツ実施率を
50%に向上(2030年)

パラスポーツに関心がある
都民の割合を
80%に向上(2030年)



2020大会に向けて

都民が参加できる多種多様なプログラムを展開

東京2020オリンピック・パラリンピックフラッグツアー

- ・オリンピックフラッグ・パラリンピックフラッグを各地でお披露目
- ▶ 都内62区市町村、被災県、全道府県を巡回(2016年からの3年間)



大会マスコット選定

- ・全国の小学生の投票によりマスコットを決定
- ▶ 都では、全ての公立小学校(小学部)計1,330校の全学級が投票に参加



みんなのメダルプロジェクト

- ・都民・国民から提供を受けた小型家電等でメダルを作成
- ▶ 約5,000個のメダルに必要な金属を100%回収



カウントダウンイベント

- ・大会開催までの節目ごとにカウントダウンイベントを実施



TOKYO RUGBY MONTH 2020

- ・日本中を感動と勇気で包み込んだラグビーワールドカップ2019™のレガシーイベントを実施
- ・様々な経験を東京2020大会につなげる



- 聖火リレーの実施に向けた準備や事前キャンプ誘致に向けたPR等を支援
- 施設見学会や競技体験会など、都民等が新規恒久施設を利用できる機会を提供
- 東京2020参画プログラムを活用し、幅広い人々の大会関連イベント等への参加を促進
- 自治体・企業等と連携し、みんなでラジオ体操プロジェクトを実施



ボート体験会の様子



シティ装飾で開催都市の雰囲気を出

- ラストマイル、空港、主要駅などで統一的なデザイン装飾を行うシティドレッシングを実施
- 大会開催までの節目等で都庁舎や競技会場等の東京らしさや大会を象徴する施設のライトアップを実施



ラストマイル(オリンピックスタジアム)



都庁舎のライトアップ

2020のその先へ

かけがえのない感動と記憶を、心のレガシーとして次世代に引き継いでいく



大会の開催を記念するものを街の中に残し、大会の記憶をレガシーとして次世代に引き継ぐ

《オリンピック・パラリンピックの名を冠する2つのレガシーパーク》

武蔵野の森オリンピック・パラリンピックパーク(仮称)

- 多摩地域のスポーツ拠点
- 自転車競技(ロードレース)や近代五種などの数多くの競技が行われ、大会会場としてのにぎわいが創出



武蔵野の森公園



武蔵野の森総合スポーツプラザ



東京スタジアム

有明オリンピック・パラリンピックパーク(仮称)

- 大会会場が集積
- 大会後、周辺は「有明レガシーエリア」として大会のレガシーを生かしたまちづくりを推進



有明アーバンスポーツパーク(仮称)



有明親水海浜公園(仮称)



有明アリーナ



有明体操競技場

【画像は設計段階のものであり、実際とは異なる場合があります。】 ©Tokyo 2020

大規模展示物や銘板を活用し、競技会場や地域の更なる活性化につなげていく



オリンピックシンボル



大会マスコット像



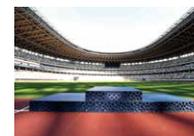
大会時の様子を伝える銘板(過去大会の例)

大会の記念品や記録等を「アーカイブ資産」として未来へ継承

■アーカイブ資産の例



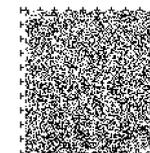
©Tokyo 2020
パラリンピックメダル



©Tokyo 2020
東京2020オリンピック表彰台



©Tokyo 2020
ボランティアユニホーム



2020大会に向けて

大会を支えるボランティアの育成

- 年齢・性別・障害の有無等に関わらず、多くの都民がボランティアとして安全・安心に参加できる環境を整備
- シティキャスト向けの研修を組織委員会と連携して実施し、大会の概要や心構え、障害者のサポート方法や感染症対策など、ボランティア活動に必要な情報を提供



シティキャスト

- 研修は集合型の研修に加え、集合型での開催に代えてパソコンやスマートフォンから受講できるオンライン研修も活用

	人数規模	応募者数
フィールドキャスト(大会ボランティア)	8万人	約20万5千人
シティキャスト(都市ボランティア)	3万人	約3万7千人



ラグビーワールドカップのボランティア

- ラグビーワールドカップ2019™を通じてボランティアの運営ノウハウや知見を蓄積するとともに、東京2020大会に活用
 - ▶東京会場ボランティア 約2,400人
- 区市町村や企業、団体等と連携・協力し、街中で困っている外国人に声をかけ、道案内等の手助けを行うボランティアを育成
 - ▶外国人おもてなし語学ボランティア 約5万4千人(2019年)
- 街なかで外国人旅行者に東京の魅力を紹介するほか、ニーズの高い観光ルートでガイドを行うボランティアの募集・登録を実施
 - ▶観光ボランティア 847人(2012年) ⇒ 2,779人(2019年)
- 中高生を対象に、おもてなし手法を学ぶ講習会等を実施し、将来の観光ボランティア候補生(おもてなし親善大使)を育成

ボランティア参加希望者の拡大に向けた取組を推進

- ボランティア情報の総合ポータルサイトを開設し、都民のボランティア活動を応援するための多様な情報を一元的に発信
- ポータルサイトに特集コーナーを開設し、家にいながらでもできる「新しい日常」における共助を推進
- ボランティアに関する継続的・先進的な取組を行っている団体等を表彰
- 企業におけるボランティアへの参加気運の醸成や裾野拡大を図るため、ボランティア休暇制度の整備を支援



東京ボランティアポータル

2020のその先へ

大会に向け培われた、ボランティア精神・助け合いの心を、文化として定着させることで、みんなで支える共助社会を実現

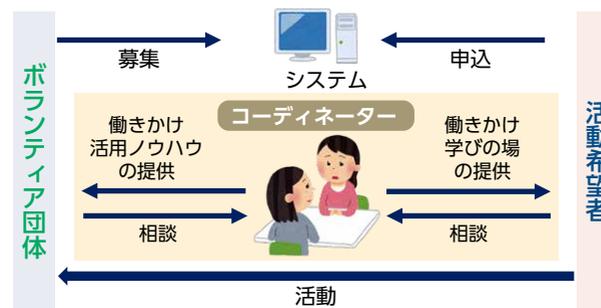


大会でのボランティア活動の経験を次の時代へつなげ、ボランティア文化を定着

- 大会におけるボランティア等に携わった人のプラットフォームとなる「東京ボランティアレガシーネットワーク」を構築し、ボランティア活動等を支援する体制を強化



- 障害者スポーツのボランティア活動を活性化させるため、タイムリーな情報提供やきめ細かなコンサルティングを実施



- 地域のボランティア団体等の運営の参考となるよう、シティキャストの運営システムの概要を公開

